様式9（添付1－4）

平成31年度 帰国・外国人児童生徒等教育の推進支援事業
（Ⅱ 定住外国人の子供の就学促進事業）
事業内容報告書の概要

都道府県・市区町村・協議会名【 豊田市 】

平成31年度に実施した取組の内容及び成果と課題

1．事業の実施体制

・豊田市経営戦略部国際まちづくり推進課より委託を受け、特定非営利活動法人トルシーダが実施した。

.スタッフは、教室長1名、日本語指導者5名(教室長を含む)、通訳3名(面接時)。豊田市から外国人教育支援員としてポルトガル語の通訳1名が4月から6月まで週3日、7月からは週4日派遣された。

・8月までは初級1、初級2、初級3、中卒認定試験対策の4クラスで実施し、9月より新規入室者受け入れに伴いクラス編成を見直し、ゼロレベル、初級の2クラスで実施した。

・日本語指導は日本語指導歴21年、13年の有資格者を中心に各クラスの担当者を決め、中長期の目標、カリキュラムと週案を話し合い、授業案を立てて実施した。適宜クラス毎に授業時間外で打ち合わせ時間を持った。教室全体の運営等については、月1回「先生の日」を設け、授業を休みにして話し合った。

・地域との交流や体験学習、社会見学、安全講話など課外活動については、教室長、副教室長が関係機関との連絡を取り実施した。

・入室希望者の問い合わせや受付への対応は主に教室長、副教室長が行った。

・保護者への連絡、保護者・子どもとの面談については教室長、副教室長と必要な場合ポルトガル語、中国語、ネパール語の通訳を配置して実施した。

2．具体の取組内容

・不就学の外国人の子供に係る学校等との連絡調整

豊田市及び近隣市町村の教育委員会、国際交流協会等から、不就学等の子どもが日本語を学習する場をさがしているなどの連絡を受け、本人及び保護者との面談で状況の聞き取りを行った。当教室に通えない状況の場合は、他の教室等の情報提供を行った。就学年齢である場合は就学の手続きなどについてアドバイスをしたり、居住地の教育委員会、学校に連絡をとったりした。当教室の卒業生や行政書士を通じて問い合わせがあるケースもあった。

本取り組みでの学習を経て就学を希望する小中学生については、教育委員会及び編入する予定の学校との連絡調整及び面談同行を行った。

・学校外における、不就学等の外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導のための教室の開設

豊田市保見ケ丘UR都市再生機構の集会所を利用し、日本語指導員を配置し、不就学等の子どもに対し日本語、教科指導を行うための教室を開設した。

・不就学等の外国人の子どもに対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に係る指導を学校外で行う指導員の研修

毎月、日本語指導者と通訳が指導内容や方法、複雑な家庭事情の子どもに関して話し合ったり、情報を共有する「先生の日」を実施した。

外国人の子供に対する日本語、教科若しくは母語指導又は学習習慣の確保に関する講演会やシンポジウムに参加した指導者が講師となり、内容の共有を行い今後の指導にどう生かして行くかを話し合った。

3. 成果と課題

・豊田市及び近隣市町村の教育委員会、学校、国際交流協会等との連絡調整により、日本語を学ぶ場を求めている子ども、不就学、不登校状態にあり居場所を失っている子ども及び保護者に情報を届け、日本語教室に受け入れることができた。

・ブラジル人学校に通いながら本取組で学習中の子どもが中学校への編入を希望した際、海外に長期滞在中の保護者と連絡を取り、代わりに教育委員会及び編入する予定の学校との連絡調整を行い、保護者の帰国に合わせ教育委員会と学校の面談を行い、無事編入することができた。編入後も学校と保護者の間に立って円滑に学校生活が送れるよう支援を行った。

・ブラジル人学校で友人関係がうまくいっていないという理由で小学校編入を希望した子どものケースでは、保護者の同意を得て学校へ情報提供し子どもが円滑に学校生活を始めることができた。

・発達障がいのある子どものケースでは、学習者である子どもよりも保護者がサポートを必要としていると見受けられた。通常の教室活動においては、ほかの子どもたちと同様にできる活動と困難なことを見極めながら日々試行錯誤で授業を行った。保護者の希望も踏まえ、体験的な活動と地域との交流の機会を積極的に設けたところ、母子ともに大変満足度の高い結果となり、保護者への心理的なサポートになったことは成果である。今後も指導者、通訳が専門的な知識を深め、活動の中でできることを考えていくことが課題である。

・義務教育年齢の子どもの不就学状態解消を目指したケースにおいて、保護者は中学編入を希望したが、子どもはブラジル人学校編入を希望した。教室長、副教室長が通訳を伴い保護者・子どもと複数回面談を行ったが解消には至らないまま、転居により支援を終了することとなった。保護者や子供との関係作りの難しさを痛感。支援の在り方を考え直す必要があることが課題である。

・ブラジル人学校の高等部を卒業したものの進路が決まらなかった子どものケースにおいて、専門学校進学や正社員での就職を目標に日本語学習を始めても、アルバイトや派遣の仕事が決まると止めてしまう子どもは少なくなかった。将来の見通しを持って学習を続けられるようにできなかったことが課題である。

・学齢超過で8月以降に来日し高校進学を希望するケースでは、日本語学習期間や受験制度、高校の選択肢について正しい情報を提供することで、保護者・子どもに再来年度の受験を納得してもらうことができた。

・中卒認定試験対策クラスでは、1名が国語・理科・社会を受験し、国語と理科の2科目合格した。社会に合格するためには、子どもによっては2年程度の日本語学習期間が必要であることが課題である。

・毎月、「先生の日」を行ったことで新しい学習者が加わった際に、学習内容や指導方法の検討がスムースに行えた。また、通訳が参加することでブラジル人学習者が得意とすること苦手とすることを知ることができた。

・指導者、通訳が参加した講演会の内容報告をすることで、全員が必要な情報を共有し同じ心構えで指導に当たることができた。

4. その他（今後の取組等）

・当教室は、ブラジル人の集住地区である保見団地にありながら、他地域からの参加希望が多く、その対応に追われている現状がある。ブラジル人学校が団地内に移転したこともあり、日本語学習の機会の少ないこれらの子どもたちがもっと参加しやすい環境を整えていきたい。

・ブラジル人学校の高等部卒業生及び在学生に対し、将来の見通しをもって学習を続けられるよう進路に関する情報提供の機会を増やしていきたい。

・保護者・子どもとの関係作りの重要性と難しさを改めて感じた。必要とされる支援を行えるよう、「先生の日」を来年度も開催したい。

※　枠は適宜広げること。（複数ページになっても差し支えない。）　成果物等があれば別途提出すること。